ちょっと知りたい 医学の豆知識

パーキンソン病

副院長　神経内科　三谷和子

はじめに

パーキンソン病は、脳が原因で体の動きに障害があらわれる病気で、何年もかけてゆっくりと進行します。効果的な治療薬もあるため、発症から長い年数にわたりよい状態を保つことができます。早い段階からきちんと治療を始めることが大切です。

原　因

脳の奥にある「黒質」の神経細胞が変性し、ドパミンという運動の調節を指令している神経伝達物質が減少してしまい、身体が動きにくくなるのです。他の中枢神経や自律神経も障害され、精神症状や自律神経の障害もあらわれます。

症　状

さまざまな神経の障害に伴い多彩な症状が現れます。

4大徴候

1.ふるえ(安静時振戦)　2.こわばり・固縮　3.動作緩慢　4. 姿勢反射障害

前傾姿勢で小さな歩幅で小刻みに歩く。1歩が踏み出せずすくむ。歩行中に向きを変えたり止まったりできなくなる。精神症状（抑うつや幻視）もあります。自律神経障害で最も多いのは便秘で、起立性低血圧は失神につながります。

進行の度合い（Yahr重症度分類）

Ⅰ 症状は片側の手足のみ。日常生活への影響はごく軽度
Ⅱ 症状が両側の手足に。多少の不便はあっても日常生活に支障はない。
Ⅲ 歩行障害や姿勢反射障害が加わる。活動がやや制限されるが日常生活は自立
Ⅳ 自力での生活は困難で一部介助が必要
Ⅴ 車椅子での生活や寝たきり。全面的介助が必要

画像検査

DATスキャンでドパミン神経の減少を評価

治　療

大きくわけて3種類の治療法があります。

1.薬物療法：ドパミン系を補充する薬を始め様々な薬があり、年齢や症状により組み合せて使います。代表的な2剤を紹介します。

Lドパ：脳内でドパミンに変化して、不足しているドパミンを補います。治療効果が高く、速効性に優れているのが特徴です。

ドパミンアゴニスト:ドパミンに似た作用をもつ薬です。治療効果がやや弱く、ゆっくり効くので、1日中穏やかで安定した効果を得られます。

2.脳深部刺激療法：薬物療法で症状の調整が難しい場合には考慮します。脳の奥のドパミンに関係する部位に電極を埋め込み、弱い電気刺激を与えることで運動機能を改善します。

3.リハビリテーション：診断されたらすぐにリハビリテーションを始めることが大切です。歩行やストレッチなどを積極的に行うことで、生活に支障のない状態を長く保つことができ、薬の使用も最小限ですみます。